

# ふれあい

## 2015年 秋季号 vol.60

2015年(平成27年)11月16日発行

日本医療機能評価機構認定病院  
医療法人社団 浅ノ川 金沢脳神経外科病院 広報誌  
TEL : 076-246-5600 FAX : 076-246-3914  
石川県野々市市郷町262-2  
http://www.nouge.net



**病院理念** 脳神経外科専門病院として私達は患者の皆様により高度の医療技術を提供し、公平で平等な患者中心の医療を行います。

## 脳卒中治療の進歩



副院長・脳卒中センター長  
池田 清延

脳血管障害は脳卒中、中風とも呼ばれますが、「卒中」とは突然、悪い風にあたって倒れる」という意味です。また中風は「邪風の中あたって打ちのめされ、半身不随となる」が語源とされています。英語でも「stroke」と言われ、「一撃」の意味です。つまり「脳卒中」とは脳が突然に傷ついて倒れる」という意味のようです。

脳卒中には脳梗塞(=脳軟化症)、脳出血(=脳溢血)、クモ膜下出血(脳動脈に出来た瘤の破裂による出血)がありますが、とこの詰まりは脳血管が切れるか詰まるかです。昭和55年まで日本人死亡率の第1位でしたが、減塩の指導や皆さん意識向上と医学治療の進歩などにより、肺炎にまで抜かれて第4位に減っています。しかし死亡率は減ったものの発症率は減少しておらず、後遺症を残しての生活を強いられる方々がむしろ増えています。脳梗塞は高血圧、糖尿病、脂質異常のある方、脳出血は高齢で高血圧があ

り、飲酒量の多い方に起きやすいといわれています。これらはメタボリック症候群の肥満、高い中性脂肪・低い善玉コレステロール値、高血圧症、空腹時高血糖に致しており、メタボ予防こそが脳卒中の予防と言えるでしょう。まさに食同源です。ちなみにクモ膜下出血は喫煙との関係が深く、特に女性に多い傾向がありますので、ご注意ください。

脳卒中はある日突然起こるため恐ろしいのですが、前兆が全くないわけではないのです。脳卒中の前兆を単なる風邪などとかたづけずに見逃さないことです。クモ膜下出血における警告発作(本当にひどい出血の1~2週間前に突然に起き数日で軽快する頭痛発作)や1時間以内で治る麻痺・言語障害などの過性脳虚血発作などこそ、脳卒中の警告なのです。

また脳梗塞の場合では、時は金なりならず「Time is Brain」として発症後3~45時間以内に血栓を溶かすtPAというお薬を注射すれば脳の機能が回復する可能性が非常に高い。脳卒中はまさに時間との勝負なのです。そのうちに治るだろうと高をくくっていると生、後悔することになってしまいますよ。

脳神経外科の治療技術は、画像診断の発達と共に画期的に進歩しています。私が医者になった昭和51年にはまだ頸動脈に針を刺して行う脳血管造影検査が行われていましたが確定診断が難しく、脳出血と脳梗塞の区別がつかないこともありました。しかし、1970年台のCT

スキャン、MRIの実用化により画像診断の精度は格段に向上しました。昭和52年には金沢大学に頭部CTが搬入され(日本で6台)、出血や脳梗塞の大きさ、場所がはつきり見える画像に驚嘆したことを覚えています。やがてMRIが普及し、今では脳の血流や機能もSPECT、PET検査で診断出来る時代となってきています。

脳神経外科手術も20世紀初めの肉眼的手術から1960年代の手術用顕微鏡を用いた微小脳神経外科の導入により、成績が飛躍的に向上しました。一方で心臓疾患に行われていた血管内治療が1990年代から脳外科領域にも行われ始め、脳動脈瘤をコイルで詰めたり、詰まった脳内の血栓を溶かしたり、頸動脈の狭くなった場所を風船やステント留置などで広げたりできるようになってきています。また子供の脳出血原因の一つである脳の血管奇形に対して1990年に日本に導入されたガンマーナイフによる放射線療法で手術をせずに病気を治せる治療も可能となりました。

脳神経外科医となつて40年、診断法と外科的治療法の新旧の大きな転換期におられたことの喜びと、子供の時に初めてテレビを見た時の驚き以上に大きな感動を覚えています。このように進歩してゆく脳神経外科診断と治療法を積極的に取り入れ、ここ金沢脳神経外科病院で少しでもより多くの患者さんに安心と満足の得られる医療を提供出来ればと思っています。





